

近世初期における小袖意匠  
—近世初期風俗画を中心に—

目白大学短期大学部 末久 真理子

小袖は室町時代の中頃より表着として着用されるようになり、男女を問わない一般的な衣服として着用されるようになった。平面的衣装構成の形態をもつ小袖の装飾表現の主体は、そこに描かれている文様や文様を含む意匠の配置といえ、近世においては江戸時代前期以降よりそれぞれの時代を反映した小袖意匠が現れてくる。小袖は次第に形式化、あるいは固定化されてくると捉えられる。

ここで慶長期から寛文期頃にかけての遺品を概観すると、いわゆる慶長小袖と呼称される小袖遺品群のほかに、それとは異なる様相を示す小袖意匠を見出すことが出来る。この特徴的意匠が固定されない小袖意匠をどのように捉えていくべきなのであろうか。このことから、当該期頃は多様な意匠形式が存在する近世小袖意匠の萌芽的形成期ではないかと推察される。また桃山小袖と寛文小袖を繋ぐ慶長小袖の特徴には、大局的な視点からは前後の意匠様式と離れている印象を受け、両者の小袖様式間を繋ぐような意匠上の特徴が存在するのではないかと推測される。

本発表では、近世初期に発生した慶長小袖から寛文小袖に至る間の小袖意匠の成立、発展の過程を、主に意匠形式の変遷という側面から論じるとともに、その意匠形式の成立過程の背景にある要因についても言及を行っていきたい。その際に、当時の時世粧を表現したとされる近世初期風俗画を用い、数少ない遺品を補いながら小袖意匠についての解明を行うことを目的としている。

まず、近世初期風俗画 39 作例を選出し、そこに描かれた意匠構成の特徴を大まかに分類した。その際に、風俗画の画風などによる小袖意匠に対する影響を考慮して、ジャンル別に小袖意匠の特徴を論じた。その結果、ジャンルを超えた小袖意匠が存在し、作例間におけるその類似性は主に年代別に関与していることを指摘した。同時に、風俗画に描かれた小袖意匠が実際に則した意匠表現であったのかという問題を検討するために、小袖遺品などとの照合に努めた。以上の検討から、当該期における6つの小袖意匠形式を見出し、これらを時系列にして各意匠形式についての検討を行った。これらを概観すると、第1に、区画に収められた文様が現れて強調されるようになること、第2に、それぞれ6つの意匠形式がその前後の時代の小袖様式と連繫していること、第3に、同時期に発生した複数の小袖意匠形式は相互に、それら意匠形式が持つ要素の一部を交換、あるいは転用して成立していることを指摘することができた。

また、風俗画に描かれた小袖意匠の実写性を論じた際、比較対照とした小袖遺品の中に武家伝来の服飾を複数見出せたことから、近世初期における小袖意匠の起源と成立について検討するために、小袖意匠と武家服飾意匠の関連性についても考察を試みたい。